

日本植物形態学会大会 WG 最終報告

平成 30 年 12 月 31 日

日本植物形態学会大会 WG（以下 WG）設立の趣旨：

日本植物形態学会（以下、形態学会と略す）の参加者（発表者）は増加傾向にあり、その結果として、ポスターあたりの閲覧・討論の時間が減ってきている。会場やポスターボードといったリソースの確保の点でも、現在の様式での大会運営は今後難しくなる可能性がある。この現状を鑑み、将来を見据えた大会運営の方法（ポスター発表を口演にする／もう 1 日大会を延長する／日本植物学会（以下、植物学会と略す）との関係をどうするか）などを、WG を立ち上げて議論するよう当時の形態学会執行部より要請があった。

1. WG 設立前までの状況の分析

形態学会大会は近い分野の研究者が集まり、アットホームな雰囲気に参加・議論をできるという点が魅力である。一方、末尾の参考資料の図（2005-2016 の期間）に示すとおり、多少の増減はあるものの演題数（青線）は増加傾向にあった。それに伴い、ポスター閲覧時間（赤線）は減少傾向にあった。開催都市圏の規模と参加者数には一定の傾向があるようにも見えるが（参考資料の表、2002-2016 の期間）、開催地から演題数を推定することも困難と思われる。よって、形態学会大会運営側が前もって確保すべき時間を推定することも難しい。また、状況によっては形態学会として会場を使用できる時間に制約が出ることもあった。これらが合わさり、2010 年以降にポスター発表時間とポスター演題数のアンバランスがたびたび生じるようになった。このアンバランスは、会員の発表と討論という大会本来の目的を達成できなくなることに繋がりがねないものである。加えて、全てのポスター発表を俯瞰して評価する時間がないことは、ポスター賞の選考を難しくさせる。そこで本 WG では、大会の魅力を失わずに上記問題点を解消する大会運営の方法に加え、その方法を採用した際に生じ得る課題についても議論することとした。なお、WG メンバーについては様々な可能性と課題を探ることができるよう、勤務地や所属機関に多様性を持たせるよう選出した（参考資料）。

2. 問題を解決する大会運営の方法の議論について

WG ではまず、大会開催様式を大きく変更しない大会運営の方法と、大きく変更する大会運営の方法に分けて議論することとした。この理由は、一緒に議論を進めると焦点がぼやけることと、分けた方が抜本的な改革案が出やすいと期待されたことにある。

2.1 開催様式をあまり変更しない場合の開催方法

これについては、「大会を早めにスタートさせて必要な時間を確保する」と、「会場を使える（ポスター発表に使える）時間やリソース（会場の大きさやポスターボードの枚数）に応じて演題数を制限する」という 2 つの開催方法が提案され、それぞれについて実現可能性と課題を議論した。

図1より、2011年～2016年のようにポスター閲覧時間の平均が3分を割り込むようになると、「時間不足」を感じるようになるのだと推定された。仮に川崎（生田）での大会時の演題数（68件）を例外とできるのであれば、近年はおおよそ50-60演題であり、最低でも2時間30分のポスター発表時間を確保する必要がある。これを踏まえると、評議員会を含めた大会を午後から始めては全くの時間不足になる。

これについて、以下の3つの大会運営様式が提案された。

提案1：大会を午前から確保し開催する。例えば、ポスター発表時間を2時間30分確保するとした時には、以下のようなプログラムが想定される。

プログラム（例）

評議員会：11:30-12:30（昼食兼）

総会：13:00-14:00

講演会：14:00-15:30

ポスター発表：15:30-18:00

この案に対しては、以下のような課題と解決策が議論された。

課題

- ・必ずしも午前中から会場を確保できるとは限らない。
- ・遠隔地から出席する、評議員、役員の泊数が増える。

解決策

- ・予算の範囲内で植物学会大会とは異なる会場を使用する。評議員会の会場のみ形態学会会場に近隣の施設を使うことも検討する。
- ・評議員・役員の泊数の増加に対する抜本的な解決策は無いが、影響を受ける人数は限定されるので、WGとしては許容の範囲内と考える。

提案2：会場と十分な時間が確保できるのであれば、植物学会翌日に開催する。

下記にプログラムの一例を記すが、演題数に応じてポスター発表時間を任意に設定できるのが、この案のメリットである。

プログラム（例）

評議員会：9:00-10:00（昼食兼）

総会：10:00-11:00

講演会：11:00-12:30

ポスター発表：13:30-16:00

この案に対しては、以下のような課題と解決策が議論された。

課題

- ・通常、植物学会大会は最終日午後に会場撤収を開始するので、会場、ポスターボード等のリソースの使用が困難であることが予想される。

- ・ 研究交流や討論の場としての、懇親会の開催が困難である（参加者が見込めない）。
- ・ 遠隔地から出席する、評議員、役員の泊数が増える。

解決策

- ・ 予算の範囲内で日本植物学会大会とは異なる会場を使用する。または、同じ会場を植物形態学会として確保する。
- ・ 評議員会だけでも前日（日本植物学会大会終了後）に開催することで、午後早い時間に終了することは可能である。
- ・ ポスター発表内容についての議論などは深めることは叶わないが、懇親会を大会前日に開催することも可能である。

提案3：ポスター演題数に制限をかける。

これは、開催地のホスト側から事前に確保できるポスターボードの枚数や会場の広さ、使用できる時間帯に関する情報を入手し、その状況に合わせて演題数に制限を設けるものである。運用の方法として、先着順、学生を優先する、一つの研究室から複数件の演題発表がある場合は研究室主宰者に優先順位をつけてもらう、植物学会大会で類似・関連した発表を行う発表者に遠慮していただくといった方法が提案された。

この案に対しては、以下のような課題と解決策が議論された。

課題

- ・ 会場やポスターボードの都合といえども、形態学会の現状を無視した制限（例えば、ポスター発表を最大30件とするなど）をかけることは難しいのでは無いか。
- ・ 会員の権利として、会則第21条に「会合に出席して講演をし議事に参加し、（以下略）」と定められているため、講演の制限はこれに抵触する恐れがある。

解決策

- ・ 大会参加費を調整するなど、一定のリソースを確保する（もし、これが可能なのであれば、そもそも制限をかける必要がないかもしれない）。
- ・ 演題申し込みは会場確保のあとなので、想定を超える演題申し込み（例えば、70件を超える申し込み）があった場合には適用を考える。
- ・ 会則への抵触という課題に対しては、解決策がない。

2.2 開催様式を大きく変更する場合の開催方法

これまでの開催様式は、植物学会大会開催地や植物学会大会実行委員に形態学会会員がいることが前提となっていた。しかし、短期的な成果主義や教員人件費の削減を迫られている昨今の大学・研究機関を取り巻く状況を鑑みると、今後、植物学会大会開催地や大会実行委員に形態学会会員がいないという事態も想定される。このような事態を事前に想定し、これまでの開催様式を見直すことも必要である。これに対し、WGメンバーに開催方法の提案を募り、出た提案に対する課題や解決策を議論した。以下にそれを記す。

提案4：植物学会大会と完全に別日程で（独立して）開催する。

これは最も開催の自由度が高い方法で、本WG発足時の様々な課題が解決される。一方で、以下のような課題と解決策が提起された。

課題

- ・参加者の旅費、予定の調整に関わる負担が増大する。
- ・個別に開催場所やポスターボードを調達する必要がある、開催地によっては開催にかかる経費が高騰する可能性がある。これは、大会参加費等に反映される問題といえる。

解決策

- ・植物形態学に関わる他のイベント（認定NPO法人総合画像支援のイベント、植物電顕ワークショップなど）と一緒に開催する。これは実現可能性がありそうである一方で、大会運営業務が今以上に特定の先生に偏ってしまうという別の課題も生じる点には注意が必要である。
- ・さらなる内容の充実など、形態学会の魅力を一層向上させる。（形態学会だけでも参加したいと多くの会員が感じる学会になれば、旅費や予定の調整は負担とはならなくなる。）
- ・会員向けのアンケートを実施し、植物学会と完全に別日程、別の開催地で開催する場合でも参加したいかについて意見聴取をする。

提案5：ポスター発表をすべて口頭発表にする。

これは発表全体を俯瞰するという点では良い。また、ポスターボードが不要で、講演会場1部屋で大会を進行できるメリットがある。本提案については、以下の課題と解決策が提示された。

課題

- ・1人の発表時間を3分としても、演題が50件あれば最低でも2時間30分の時間を確保しなければならない。これでは、ポスター発表時間の確保が困難であるという、問題の解決にはなっていない。
- ・大会で重んじられるべき討論の時間の確保が困難になる。
- ・学会の性質上、顕微鏡像をじっくりと見ることも重要であり、そこが損なわれてしまう。

解決策

提案6を参照

提案6：口頭発表とポスター発表を組み合わせる。

発表全体の俯瞰が可能であり、ポスター発表を組み合わせることで興味ある発表に対する討論も可能という、いいとこ取りの開催様式である。本議論では、開催例として口頭発表2分+ポスター閲覧1時間30分くらいが妥当ではないかと提案された。これについては、以下の課題が提起された。

課題

- ・発表時間の総計として3時間程度は確保しなければならず、本来の課題を解決できていない。

解決策

- ・開催の自由度の高い提案4と組み合わせる。

提案7：植物形態学会の大会を植物学会のシンポジウムの1枠とする。

毎年、形態学会共催のシンポジウムを植物学会大会で開催している。これを形態学会のイベントとしてしまうというもので、開催に関わる負担は非常に小さくなる。これについては、以下の課題が提起され、解決策についても議論された。

課題

- ・未完成の発表も歓迎し、関連研究者で「より良い研究」へと発展させていく形態学会の良さが失われる。
- ・植物学会大会でのシンポジウムへは、形態学会会員でなくても参加でき、形態学会そのものの存在意義や会員になる意欲を毀損する恐れがある。
- ・上記に関連し、形態学会の会員であるメリットが *Plant Morphology* を1年早く読むことができるということだけになってしまう（1年経過後は *J-Stage* 経由で閲覧できるようになる）。

解決策

本様式を採用した際の課題についての抜本的な解決策はないが、将来的には形態学会の存在意義を議論することも必要になるかもしれない。

3. その他に大会運営に関して考慮すべき事柄

3.1 ポスター賞の審査について

2006年の将来計画WGでは若手研究者（学生含む）に入会を進める施策として「形態学会3賞やポスター賞の宣伝をする」ということが記載されている。また、「学会賞授与機構のようなものにならないような配慮は必要」ともある。本WGに関わる議論としては、ポスター賞をどのように選ぶかがある。ポスター閲覧時間の減少は、ポスター賞候補の選定時間の減少に直結する。これについては、上述に記すような十分な時間の確保と、ポスター賞対象者を絞る（学生、ポスドク）ことによって解消を図るのが適切ではないかという結論に至った。

3.2 会員の裾野の拡大について

現状、形態学会大会に参加する会員の所属の多様性は乏しい（国内のいくつかの研究室が中心となっている）。植物学会大会時に関連集会として形態学会大会を開催するにしても、植物学会大会と独立して開催するにしても、この多様性を増すことは必要である。WGでは、形態学会の学会賞（特に奨励賞や平瀬賞）を受賞された優秀な若手研究者で受賞後に大会や学会から離れた方に、もっと積極的に大会にコミットしてもらいたいという意見がでた。異動により研究内容が変わった、又は海外へ転出した研究者もある程度はいると考えられるものの、形態学会の存続や大会の充実には欠かすことのできない人材であることも事実である。もちろん、多くの受賞者は引き続き形態学会に貢献していただいているという事実を踏まえ、さらに発展させるためにあえてWGとしてこれを提言するものである。

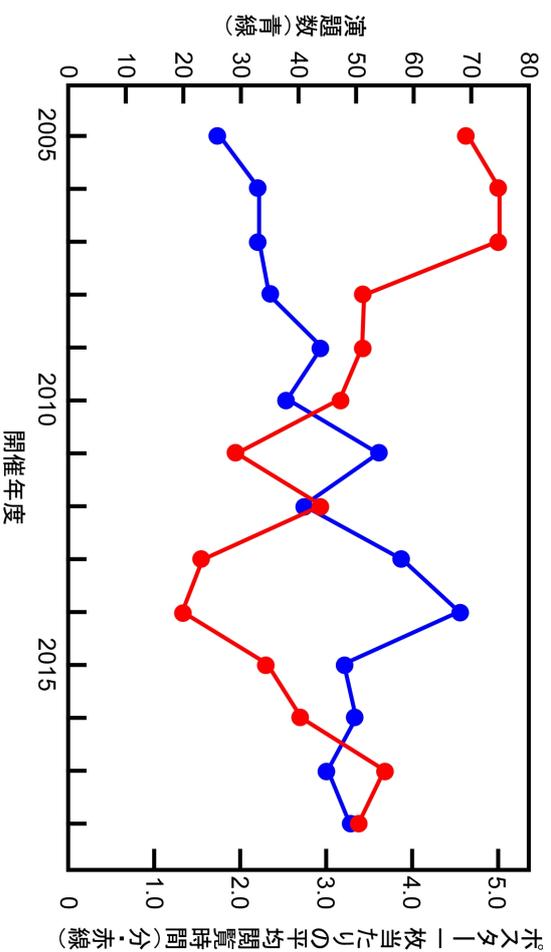
4. WG まとめ

これまで、可能な開催様式について議論してきたが、現段階で委員の意見は以下で一致した。

現在の形態学会が持つ魅力を最大限に生かしているのは、植物学会前日の開催であり、かつ植物学会と同所、または近隣の会場での開催である（上記 2.1）。演題数が、現在の振れ幅で推移するのであれば、ポスター発表の時間を 2 時間半確保することで、時間の不足感は緩和されるであろう。実際に、ポスター発表時間を 2 時間 30 分確保し、ポスター 1 枚あたりの平均閲覧時間が 3 分を超えた最近 2 年の開催では、時間の不足を感じなかったという会員の声が多く聞かれた。これに加え、ポスター賞の対象者に関する議論も進み、本 WG としてもその意義を改めて感じるとともに、中間報告を重く受け止めていただいた現執行部に感謝するところである。一方で、形態学会大会の開催は、植物学会大会実行委員会のスタンス（植物形態学会の開催を関連集会として理解してくれるかどうか）に揺り動かされてきた。これに加え、昨今の風潮の余波を受けた形で、植物形態学といった基礎科学の研究者が減ってきており、これによって植物学会大会が開催される都市に会員がいるとも限らなくなることが想定される。これらのことから、植物形態学会の魅力をより増大させて会員の裾野を広げるとともに、本報告提案 4~7 に記したような植物学会と独立した開催様式も継続的に検討することが必要であろう。これらに関わる施策を今後の学会執行部に求めることとして、本報告を締めくくることとする。

参考資料：

メンバー：宮沢 豊 (山形大学・座長)，Ferjani Ali (東京学芸大学)，佐々木成江 (名古屋大学)，嶋村正樹 (広島大学)，豊岡公徳 (理化学研究所)，八木沢美美 (琉球大学)



図：演題数とポスター1枚あたりの平均閲覧時間の推移
演題数 (青線) は要旨集をもとに調査し、ポスター1枚あたりの閲覧時間 (赤線) は、大会プログラム記載のポスター発表時間を演題数で除して算出した。

表：各年度の開催地と演題数，ポスター発表時間 (演題数は図1と同一)

年度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
開催地	京都	札幌	藤沢	富山	熊本	野田	高知	山形	春日井	東京	姫路	札幌	川崎	新穂	宜野湾	野田	広島
演題数	32	33	32	26	33	33	35	44	38	54	41	58	68	48	50	45	49
発表時間				2:00	2:45	2:45	2:00	2:30	2:00	1:45	2:00	1:30	1:30	1:50	2:15	2:45	2:45